

# 目次

はじめに ..... ix

第一部 俳諧師宗因の虚と実 ..... 1

第一章 晩年の宗因——宗因伝記研究をめぐる覚書—— ..... 3

一 「宗因連歌回帰説」の起源 ..... 3

二 素外編『梅翁宗因発句集』をめぐる諸問題 ..... 5

三 素外随筆『玉池雑藻』所収の宗因書簡 ..... 11

四 晩年の宗因に見る二面性 ..... 14

第二章 宗因顕彰とその時代 ..... 19

一 宗因俳諧発句集編纂の時代 ..... 19

二 大坂檀林の宗因称揚——『むかし口』前後—— ..... 20

三	江戸談林の宗因顕彰——『梅翁宗因発句集』前後——	26
四	宗因顕彰の方法	31
五	近代的伝記研究の必要性	33
第三章 宗因における出家とその意味		
一	宗因出家をめぐる諸問題	39
二	法雲「西翁隠士 <small>ル</small> 為 <small>レ</small> 僧序」の虚実	43
三	号をめぐる諸問題	46
四	西国体験の情報伝播	51
五	連歌師宗因の俳諧	58
第四章 宗因と伊勢 統紹		
一	「宗因と伊勢」再考	67
二	外宮御師との初期交流	69
三	宇治大火と『伊勢正直集』	74
四	伊勢下向時における交流の諸相	80

五	旗印としての「守武流」	87
六	伊勢俳壇との接触と距離	93
第五章	連歌師宗因の俳諧点業	105
一	宗因褒詞の虚実	105
二	「俳諧師宗因」像の語られ方	112
三	宗因の点業	116
四	連歌師の俳業、その功罪	127
第二部	連歌師宗因の実と虚	137
第一章	『肥後道記』の典拠と主題	139
一	宗因自筆本の発見とその顛末	139
二	諸本と本文の二系統	141
三	趣向としての『土佐日記』	147
四	主題としての『源氏物語』	152

五	紀行の作者と読者	157
第二章	陸奥行脚とその紀行	163
一	奥州紀行自筆諸本をめぐる諸問題	163
二	諸本と本文の二系統	164
三	いまの「翁」の東下り	169
四	東下りの変奏	172
第三章	大坂城代青山宗俊との交渉	181
一	宗因の大坂移住とその意義	181
二	大坂城代と宗因	185
三	寛文―延宝の大坂城代下屋敷	192
四	大坂文化の復興と西山宗因	195
第四章	『明石山庄記』と『明石浦人丸社千句』	199

一	『明石山庄記』の自筆本二種	199
二	『明石山庄記』の表現と主題	202
三	成立年記の齟齬の意味	205
四	『明石浦人丸社千句』の成立	207
第五章 主従の連歌から職業としての連歌へ		
— 近世武家社会における連歌の情理 —		
一	宗因の転身をめぐる諸問題	217
二	肥後加藤家の政事と文事	221
三	下津棒庵と京の町衆	224
四	宗因の連歌修行と新在家の文化	227
五	加藤家における宗因連歌の位置	230
六	茶事と連歌の牢人生活	234
七	述志と取次の連歌	240
八	述懐の連歌と主従の情誼	245
九	職業連歌師の義理と自由	254
十	連歌師宗因の行動と表現	262

第三部 西山宗因年譜考証

慶長十年（一歳）	.....	299	寛永十年（二十九歳）	.....	321
慶長十七年（八歳）	.....	299	寛永十一年（三十歳）	.....	324
元和五年（十五歳）	.....	300	寛永十二年（三十一歳）	.....	325
元和六年（十六歳）	.....	301	寛永十三年（三十二歳）	.....	325
元和七年（十七歳）	.....	302	寛永十四年（三十三歳）	.....	326
元和八年（十八歳）	.....	303	寛永十五年（三十四歳）	.....	326
元和九年（十九歳）	.....	307	寛永十六年（三十五歳）	.....	329
元和十・寛永元年（二十歳）	.....	309	寛永十七年（三十六歳）	.....	333
寛永二年（二十一歳）	.....	310	寛永十八年（三十七歳）	.....	337
寛永三年（二十二歳）	.....	311	寛永十九年（三十八歳）	.....	338
寛永四年（二十三歳）	.....	313	寛永二十年（三十九歳）	.....	340
寛永五年（二十四歳）	.....	315	寛永二十一・正保元年（四十歳）	.....	341
寛永六年（二十五歳）	.....	316	正保二年（四十一歳）	.....	342
寛永七年（二十六歳）	.....	317	正保四年（四十三歳）	.....	343
寛永八年（二十七歳）	.....	317	正保五・慶安元年（四十四歳）	.....	345
寛永九年（二十八歳）	.....	318	慶安二年（四十五歳）	.....	348

目次

慶安三年 (四十六歳)	.....	350	寛文八年 (六十四歳)	.....	433
慶安四年 (四十七歳)	.....	351	寛文九年 (六十五歳)	.....	438
慶安五・承応元年 (四十八歳)	.....	352	寛文十年 (六十六歳)	.....	455
承応二年 (四十九歳)	.....	354	寛文十一年 (六十七歳)	.....	463
承応三年 (五十歳)	.....	358	寛文十二年 (六十八歳)	.....	472
明暦元年 (五十一歳)	.....	362	寛文十三・延宝元年 (六十九歳)	.....	477
明暦二年 (五十二歳)	.....	363	延宝二年 (七十歳)	.....	491
明暦三年 (五十三歳)	.....	369	延宝三年 (七十一歳)	.....	515
明暦四・万治元年 (五十四歳)	.....	370	延宝四年 (七十二歳)	.....	540
万治二年 (五十五歳)	.....	372	延宝五年 (七十三歳)	.....	567
万治三年 (五十六歳)	.....	378	延宝六年 (七十四歳)	.....	582
万治四・寛文元年 (五十七歳)	.....	387	延宝七年 (七十五歳)	.....	603
寛文二年 (五十八歳)	.....	391	延宝八年 (七十六歳)	.....	635
寛文三年 (五十九歳)	.....	399	延宝九・天和元年 (七十七歳)	.....	661
寛文四年 (六十歳)	.....	404	天和二年 (七十八歳)	.....	677
寛文五年 (六十一歳)	.....	413	天和三年 (没後一年)	.....	686
寛文六年 (六十二歳)	.....	418			
寛文七年 (六十三歳)	.....	425			

目次

おわりに	691
初出一覧	689



## はじめに

西山宗因は、近世初期に活躍した連歌師・俳諧師である。本書の課題は、その存在を動態的に明らかにすることにある。

貞門俳諧と蕉風俳諧を繋ぐ談林俳諧の総帥として文学史に位置づけられてきた宗因の研究に画期的成果をもたらしたのは、野間光辰である。昭和二十年代末から三十年代にかけて、「宗因と正方」「連歌師宗因」「西山宗因」の三論を発表した野間は、その帰結として、宗因の本業はあくまで連歌にあり、俳諧は余技であったことを繰り返し主張した。談林俳諧の中心人物としての「俳諧師宗因」を、武士・町人の間にあつて連歌指導に従事した「連歌師宗因」として理解することは、革新の詩人を保守の詩人と見ることであり、文学史はここに大きく転換されたかのようである。しかし、「俳諧師宗因」にせよ、「連歌師宗因」にせよ、宗因の存在を固定的に把握する点において、文学史にとつて両者はまったく等価である。前者は芭蕉を頂点とする俳諧史観、後者は連歌の時代を中世に求める連歌史観に立つ。あらかじめ定められた価値を目指す研究の描く文学史は、その方法において漸進と遡及の違いはあつても、また、いかに委曲を尽くそうとも、なお静態的である。

もとより文学研究は「文学の研究」であつて、「文学」ではない。科学としての文学研究には、作品研究の前提として、人物研究が不可欠である。客観性ある人物研究を欠いた作品研究は、虚

誕の再生産に陥る危険を常にはらんでいる。事実の検証なしに虚構を論じることができない。宗因の人生の各段階における行動と作品が、いかなる文化的・社会的状況のもとにとられ、生み出されたのか、その変化の意味を動的に問う試みは、文学史を生きたものにするための挑戦である。宗因が、連歌師と俳諧師という二つの立場に生きたという事実は、とりわけ自明のものとして見過ごしてはならず、その意味を徹底して問わなければならない。

かかる問題意識に基づき、本書には、宗因をめぐる論考十編と年譜考証を収めた。第一部「俳諧師宗因の虚と実」では、晩年の宗因像の出所を没後百年におこなわれた宗因顕彰運動に求め、談林俳諧の祖としての「俳諧師宗因」像、および、その反指定としての「連歌師宗因」像をいったん留保したうえで、宗因の俳諧活動の実態に迫る。第二部「連歌師宗因の実と虚」では、肥後加藤家牢人から職業連歌師に転じた宗因の実像を近世初期武家社会のなかに位置づけ、諸大名との関わりのなかから生まれたその作品が、いかなる真実を伝えるべく虚構を成しているか、創作の主題と方法を明らかにする。第三部「西山宗因年譜考証」は、宗因の生涯におけるすべての行動と作品について、近世初期の文化・政治・社会の状況と関わらせつつ、具体的に考証する。

本書における「虚」とは、宗因の虚像という意味と、作品の虚構という両様の意味を含み、「実」とは、宗因の実像という意味と、虚構の目的としての真実という両様の意味を含んでいる。すなわち、宗因の虚像を解体してその実像に接近し、実像の成した虚構の意味を読み解くことを目指すものである。

第一部 俳諧師宗因の虚と実



第一章 晩年の宗因 — 宗因伝記研究をめぐる覚書 —

一 「宗因連歌回帰説」の起源

西山宗因はその晩年、当代の俳風放埒に走るを嘆いて俳諧から遠ざかり、連歌の世界に再び強い関心を寄せるようになった——このような定説を、いま仮に「宗因連歌回帰説」とでも呼ぶことにしてここに取り上げるのは、当説の持つ、存外に大きな影響力の故である。晩年に至って俳諧に倦いたのであれば当然、俳諧に親しく傾斜した時代がそれ以前に存在していなければならぬ。ではそれはいつごろからか。伝記研究は常に、連歌と俳諧の間で揺れ動く宗因像を追いかけざるを得なくなる。野間光辰執筆『俳諧大辞典』（一九五七年、明治書院）「宗因」項にある以下の件は、そのような宗因像理解から記されたものであろうし、乾裕幸による『俳文学大辞典』（一九九五年、角川書店）も概ねこれを踏襲、「連歌の時代」「俳諧の時代」の二部構成で宗因伝を祖述する。

敢て新奇を誇るの余り、門流の風体はいよいよ出でて乱雑放縦に走るに至った。しかも、それらに対する激しい非難がごとごとく宗因の一身に集中されるのである。宗因はようやく俳諧に倦いた。世上の俳風異体なることを嘆じて、老人には無用であると語りもし、また手紙にも書いている。延宝八年の作「なんにもはや楊梅の実むかし口」の一句は、そうした宗因の心境を吐露した作で、延宝九年正月十日付藤波修理宛の書簡に、「誹歳旦は不仕候、当風あわぬ事、無用に存候」といい、同年六月某日隠居所増築を報じた書簡に「連歌おもしろ

く成申候、誹は当風成まじくおほえ候」と記している。

当説は、談林俳諧の命運をも左右する。宗因の俳壇登場に始発し、その俳諧熱の冷却に伴って失速、死没を機に実質的終息を迎える談林俳諧史にとっては、宗因の内部における連俳の比重という極めて個人的な問題が、抜きがたい指標とされるのである。長きにわたるが、今榮藏「談林俳諧史」(『俳句講座 第一巻 俳諧史』、一九五九年、明治書院)から、談林俳諧敗退を招いた、宗因の意識の所在に関する部分を抜粋しておく。

「『そよよそよ』の句(尾崎註・『阿蘭陀丸二番船』巻頭発句)は、『宇津不之曾女』元禄十七年の西吟の記録によれば、彼が延宝八年正月宗因に年始に行った時、「世上誹諧異躰なる事を噂たまひ」たる挙句の作であったという。噂とは非難を含めてのこと以外ならなかったであろう。それは他の記録によっても推測に難くない。『梅翁宗因発句集』所収の「当世の風躰年々日々ところどころにうつりかはる。新しく珍らしくかなはぬ老の耳にだにおもしろくうらやましながら、初学の人いづれをよしとおもひさだむるかたなくやおほえて、今つくばや鎌倉宗鑑が犬ざくら」なる句調には、目まぐるしく変貌してゆく異躰な俳風に悲嘆する心がある。これについては惟中も次のような記録を残している(尾崎註・『続無名抄』引用、後掲のため省略)。

また、江戸の在色宛の手紙〔解脫抄〕所引に、「誹の事も老衰益なき」と嘆いたのも、「なんにもはや楊梅ヤマモモの笑サネむかし口」〔阿蘭陀丸二番船〕と、急激に変貌する俳風の中で自らの昔口を自虐的に嘲笑したのも、すべて同じ延宝八年のことであったが、また京都の三井秋風の異躰の激しさにあきれて「秋風が新しき口ぶり、三吟を見て我を折候」宗因と言ったのも、それから間もない頃のことであった。かくしてこの変風時代の俳風に対する宗因の態度は極めて批判的であったと共に、しかも「老衰益なき」として俳諧に対する熱意も漸次冷却してゆく方向を取ったようである。

第二部 連歌師宗因の実と虚





## 第一章 『肥後道記』の典拠と主題

### 一 宗因自筆本の発見とその顛末

本章でとりあげるのは、二十九歳の西山宗因が、寛永十年九月の末に親類知友と別れて故郷熊本を発ち、十月十五日、京都堀川本國寺に隠棲中の主君加藤正方、法名風庵の許にたどり着くまでの、約二十日間の紀行である。高知県佐川町立青山文庫所蔵本は、その現存唯一の宗因自筆本ながら、惜しむべきことに外題簽の剝落により書名を欠き、奥に記される「幽林野子」の号も他に使用例を聞かない。

本書が初めて活字化されたのは、石塚千年編集、大口鯛二・今泉定介指導の歌学雑誌『ちぐさの花』<sup>(1)</sup>誌上であった。同誌第三号（一九〇八年十一月）から第四号（一九〇九年一月）にかけて、「田中宮相の家に蔵められた」「もと肥後熊本の加藤家の臣」たる「幽林野子」による「寛永九年の国替の折に流浪して更に京都にのぼりし紀行」が、「読者もし其の伝を知りたまへれるあらば、幸にをしへたまへかし」との告知を伴って掲載されたのである。このとき冠された「飛鳥川」という典雅な書名のゆえんは、もちろん、本文冒頭の一句をとった仮称に過ぎなかつたのであるが、それが取められた「ふる野の千草」欄が、香川景樹や清水浜臣らの歌文を当代歌人の作文修練の参考として供すべく設けられていたことも、おそらく無関係ではないだろう。

「飛鳥川」は、ついで、歌学雑誌『国風』<sup>(2)</sup>第九六号から第九八号にも連載されたらしい。その謄写本たる大阪府

立大学術情報センター山崎文庫蔵『飛鳥川』に書き留められた宇野東風の緒言によれば、「明治四十二年の頃」<sup>(2)</sup>、宮村典太翁より示されし雑花錦語集所載八代略記の内に宗因の伝<sup>(3)</sup>を見つけ、本文内容との一致を認めた結果、本書が宗因の著作であると確証するに至ったという。

御歌所寄人を務めていた大口鯛二が、「田中光顕伯の所蔵であるとして、四つ半胡蝶綴の宗因自筆の一冊」を、熊本出身の国文学者彌富破摩雄のもとにもたらしたのも、「明治四十年の頃」の出来事であった。「元より其の時は、其の誰れの作、誰れの筆であるかは不明であつたが、後に此れが宗因の自作自筆であることを発見した」彌富は、「便宜上、巻末の歌の詞を取りて「倭文の緒環」と称すること、」<sup>(4)</sup>して、みずからの手控えをもとにその全文を翻刻紹介している（彌富「西山宗因の上京紀行」、『近世国文学之研究』、一九三三年、素人社書屋）。

同じ本でありながらかく二通りの書名で認識されるという錯綜は、しかし、さほどの拡がりを見せなかつた。一九三三年四月に行われた審美書院版複製『宗因飛鳥川』附録解説「宗因の『飛鳥川』に就いて」<sup>(4)</sup>において、小宮豊隆が、「勿論『飛鳥川』といふ名前は、宗因ではなく、後人のつけた名前」と断りながらも、作品の「全体に冠するには、寧ろ最も適切な名前の一つであると言つて可い」として「飛鳥川」の仮称を是認したことは、本書の書名をめぐるその後の認識を決定づけたと思ひ<sup>(5)</sup>。同解説によれば、本書の出現は、「宗因の伝記は殆んど知られてゐな」かつた昭和初期の学界にとつて、「宗因と熊本との関係、宗因と八代との関係、宗因と正方との関係、宗因と豪信僧都との関係、その他それに似た、宗因学上重要な」諸問題が一挙に解明される、「実に空谷の跫音とも称すべき、一事件」であつたという。

右に記した翻刻・複製の以外にも、影印や翻刻の複数備わる今日<sup>(6)</sup>、改めてこの作品を論じようとするに際して、自筆本出現当時の混乱に立ち返るところから始めたのは、その混乱を誘発した要因を、むしろ、本書の本質として

第三部 西山宗因年譜考証

## 凡 例

一、本年譜考証は、『西山宗因全集 第五卷 伝記・研究篇』（二〇一三年、八木書店）「西山宗因年譜」に基づき、その誤謬を訂正し、遺漏を補正しつつ、各項目に考証を併記したものである。

一、西山宗因の行動の解明と、著作の網羅編年に努めた。

一、考証に当たっては、根拠・典拠を明記する方針をとった。

一、『西山宗因全集』収録の作品・資料については、次の要領で（ ）内に略記した。

① 千句 4 …………… 『西山宗因全集 第一卷 連歌篇一』 「千句」 4 風庵懷旧千句

② 74 …………… 『西山宗因全集 第二卷 連歌篇二』 74 「煙つき」 百韻

③ 発句 13 …………… 『西山宗因全集 第三卷 俳諧篇』 「発句」 13 「明暦や梅のあらたに開くる日」

④ 評点連歌 1 …………… 『西山宗因全集 第四卷 紀行・評点・書簡篇』 「評点」 「連歌」 1 「夢かとよ」 百韻

⑤ 西山家家伝 1 …………… 『西山宗因全集 第五卷 伝記・研究篇』 「西山家」 「家伝」 1 西山三籟集奥書

⑥ 懷紙歳旦 1 …………… 『西山宗因全集 第六卷 解題・索引篇』 「補訂」 「現存真蹟一覽」 「懷紙」 「歳旦」 1 歳旦和歌連歌懷紙

一、『西山宗因全集』未収録資料については、考証においてその概要を紹介した。

一、宗因著作のうち、自筆本については、奥書のある場合はこれを引用し、『西山宗因全集』未収録資料は書誌を略記した。

一、宗因著作のうち、俳書については、原題簽の存する場合のみ外題を記し、内題・奥書・刊記は原則として原文を引用した。

一、考証において参照した文献の書誌については、初出箇所最新の情報を記すに留めた。

慶長十年（乙巳・一六〇五）一歳

○この年、加藤清正家臣西山次郎左衛門の子として、肥後熊本に生まれる。月日未詳。俗名次郎作、実名

豊一。

宗因は、天和二年三月二十八日、七十八歳で没した。生年は、没年より逆算して慶長十年となる。

寛延三年九月、豊宮崎文庫に奉納された宗因曾孫西山昌林記『西山三籟集』奥書は、宗因の出生にかかる基礎情報として、「曾祖父西山宗因俗名次郎、作諱豊一、肥後熊本<sup>風庵</sup>の産なり。八代の城

主加藤右馬丞正方法名扈從す。父次郎左衛門、加藤肥後守家臣たり」（⑤西山家家伝1）と記す。安永六年九月刊、上田

秋成撰『むかし口』巻頭「梅翁伝」にも、「宗因は肥後の国の人、姓西山、諱豊一、俗名次郎作といふ」（⑤編纂句集）とあり、その出生地と姓名に関して一致を見る。同時代の言として、寛文十二年三月上旬奥刊『時勢粧』の「彼人もとは肥

の後八代の生れ」（⑤伝記資料10）があるが、八代出生説は他に聞かず、おそらくは青年時の勤務地との混同であろう。また、慶安三年五月下旬の奥書を持つ柿衛文庫蔵『発句帳法眼

昌琢』には、寛永六年八月頃、宗因が実名「豊一」で興行した「すきものと」連歌百韻（②30）の詞書として「伊勢物語 竟宴、西山二郎作興行」とあり、俗名「二郎作」を同時代資料でも確認し得る。

もつとも、加藤清正の家臣であったという父西山次郎左衛門の名を、加藤家の分限帳の類に見出すことは出来ず、その家系について多くは知り得ない。宗因祖父を越前藩初代藩主結城秀康に仕えた御宿勘兵衛政友とする説（⑤雑抄58 61）もあるが、その根拠は知られない。宗因は、寛永九年の主家退転に際し、「老たる親」の慰留を振り切り、加藤正方のあとを追って単身上京したらしいが（④紀行1）、後年、その父が亡くなるや、翌日の承応三年十一月十三日には追悼の独吟連歌百韻（②74）を賦し、大坂天満の西福寺に葬ったようである（⑤西山家家伝3）から、正保四年の大坂定住を期に父を呼び寄せたものであるうか。母の名は『西福寺過去帳』にも見えず、その素姓は不明である。

慶長十七年（壬子・一六二二）八歳

○本年前後、肥後熊本积将寺に寺入し、豪信僧都に

師事して歌道を学ぶ。

『肥後道記』「釈将寺豪信僧都は、吾あげまきのころよりなにはづのこの葉をもをしへ給ひて、師弟のむつび年久しく」

（④紀行1）による。

釈将寺岩立山一乗院は、天台宗叡山正覚院の末寺で、開山・建立年次等未詳。豪信僧都はその中興開山と伝えられる（『肥後国誌』巻之弐）。維新後廃寺となり、熊本市京町二丁目にわ

ずかの墓地が残るに過ぎないが、もと京町台地北西部の崖に位置していたらしく、現在も「釈将寺坂」の地名にその跡を留めている。台地の南端には熊本城が築かれ、釈将寺坂周辺の袋小路には武家屋敷が配されていたという（『熊本県の地名』、一九八五年、平凡社）から、宗因はその辺りで生育したものが。墓地には、豪信・豪健・豪謙の無縫塔三基が並び、豪信墓表に「当時開山法印権大僧都大闍梨豪信大和尚」、裏に「寛永十六己卯年麻波□□廿五日」と刻まれ、その没年を知る。豪信が「老のなみ袖をぞしぼるはま千鳥あとを見るにも音はななれつ、」の一首を宗因に贈ったのは（④紀行1）、宗因が牢人として上京した寛永十年十月以降のことであるから、豪信晩年ま

で師弟関係は失われなかったものらしい。同様に墓銘によって見るに、豪健は元文元年十一月十四日没、豪謙は享和元年八月二十八日没。

豪信の歌歴は不明である。なお、秋成「梅翁伝」は「往年風庵君と、もに、釈将寺の豪信法印と云に、和歌連歌の道を学びし」（⑤編纂句集）と述べるが、豪信師事が正方の導きによるものであったのか、また、和歌と同時に連歌も学んだのかどうか、確証を得ない。

#### 元和五年（己未・一六一九） 十五歳

○この頃より、八代城主加藤右馬允正方の側近として仕え始める。

『風庵懷旧千句』前書「志学のところほひよりことに情けをかけてめぐみたて給し」（①千句4）による。

加藤右馬允正方は、本姓片岡氏、右馬允可重の男として天正八年に生まれた（没年より逆算）。元和五年には四十歳、宗因より二十五歳の年長である。父可重の生国は近江国で、清正の臣下となつて加藤姓を賜り（八代市立博物館広島加藤家資